

導入事例
てれたっち

意欲を高め、集中力を引き出す「てれたっち」 「自分で書ける」ことが授業への積極参加を促します



長野県上田市は教育の情報化に注力される自治体です。上田市立長小学校ではすでに全クラスに大型ディスプレイが導入され、さらに「てれたっち」の利用も開始されています。同校で積極的に「てれたっち」の活用を進める小林健先生、高瀬亜弥先生、また、上田市教育委員会学校教育課でICT導入による授業改善を推進される小池心吾指導主事にお話を伺いました。
※先生のご紹介、学校での設置状況などは取材当時のものです。



※ディスプレイは別売りです。

導入商品

外付け型タッチ化ユニット
「てれたっち」

DA-TOUCH / WB



黒板と「てれたっち」を使い分け

■ 従来の黒板と電子黒板を使い分けて、児童たちに最適な環境を

高瀬先生は黒板と「てれたっち」の使い分けに工夫されているとか。

高瀬先生:黒板を縦に3分割し、真ん中は従来どおりの黒板として、また片側の3分の1は「てれたっち」の設置スペース、反対側の3分の1はサブの黒板として使い分けています。メインの黒板には板書用に学習課題やヒントなどを書いています。また、サブ黒板には授業のまとめや練習問題を書きます。「てれたっち」では、例えば算数だったら九九表を表示して、書き込んだり、保存したりといったことを行います。前回の授業で書き込んだ内容を表示して、振り返りに使うこともあります。

小林先生:私も資料は「てれたっち」で次々に表示していきますが、その中でわかったことは必ず黒板に書き出し、授業の軌跡をたどれるようにしています。プリントも必要ですし、黒板も大事。様々なツールを組み合わせ、最適な環境で授業をしたいですね。

小池指導主事:一般に子どもは先生の話をもっと聞くことが苦手ですが、「てれたっち」があれば板書時間が削減でき、児童の待ち時間をなくせます。授業のテンポを上げることで、集中力を引き出す効果がありますね。一方で、子どもたちには聞く力を養うことも求められます。このように従来の黒板と電子黒板をうまく使い分けることで、様々な力を養ってくれることを期待しています。

■ 掲示物の作成、拡大コピーなどの手間をなくし、よりよい授業のために注力できるようになりました

授業の準備など、先生方の業務に変化はありましたか。

高瀬先生:授業の準備に時間がかかることが課題でしたが、「てれたっち」が導入されてから、その手間はほとんどなくなりました。以前は教科書などをスキャナーで取り込み、拡大コピーして貼り合わせ、黒板に掲示する資料にしていました。今では資料は1回電子データとして取り込んで保存するだけで、あとは何度でも再利用できます。また、印刷コストもだいぶ削減できたのではないのでしょうか。「てれたっち」ならばコストを意識せずに、様々な資料や教材をカラフルな画面でいくらでも児童に見せてあげることができます。

■ わかりやすさの面でもずば抜けて優れている「てれたっち」

小林先生:強調したい箇所をすぐに示せて、記憶に定着させることのできる「てれたっち」は、わかりやすさという面でもずば抜けて優れたツールです。例えば、視覚で文章を追うのが苦手な子、集中力が途切れがちの子、耳で聞くより目で見たほうがわかりやすい子——、様々な個性の子どもたちがいる中で、1つの教え方だけが正解ではありません。「てれたっち」はこうしたシーンでも学びのサポート役として活躍できます。

今後の展望を教えてください。

小林先生:導入して1年、今はノウハウがたまり始めた段階です。電子化した資料、効果のあった教材、ナレッジが教員の間で共有されれば横の広がりも期待できますね。共有の仕組みを整えば相乗効果で活用はさらに進み、児童の学力向上にもつながると期待しています。

小池指導主事:先生方が児童たちのために真剣に、また自身も楽しみながら取り組んでくださり、頼もしく感じています。「てれたっち」による授業の効率化の可能性も感じ取れましたね。ICT機器の活用を通して、「先生方の働き方改革」も実現できればと考えています。



タッチペンでポイントをマーク

取材にご協力いただいた先生



上田市教育委員会
学校教育課
小池 心吾 指導主事



上田市立長小学校
小林 健 先生



上田市立長小学校
高瀬 亜弥 先生



CLIENT DATA

導入学校 / 上田市立長小学校
所在地 / 長野県上田市
設立 / 1873年